



撮影場所◎米富繊維株式会社

奏であう人

かな

vol.53

わたなべ よした
渡邊 吉太 さん (山形市)

◎宮城県出身、山形市在住。株式会社アトリエセツナ代表取締役・デザイナー。東北芸術工科大学を卒業し、スウェーデン国立芸術工芸デザイン大学に留学後、東京でのフリーランスデザイナーを経て、2005年に同社を設立。家具から店舗まで大小さまざまなスケールのデザインを手がける。山本製作所ベレットストーブ「OU(オウ)」は、2019年のグッドデザイン賞、山形エクセレントデザイン大賞を受賞。

わたなべ あゆみ さん (東根市)

◎埼玉県出身、東根市在住。文化服装学院を卒業後、2011年に米富繊維株式会社への入社と同時に山形へ移住。2010年に立ち上げた自社ブランド「COOHEM(コーヘン)」の営業を担当。2019年に東京・馬喰町でCOOHEM初の期間限定店舗のオープンに携わった。取扱店舗の開拓、展示会でのバイヤー接客、生産の手配のほか、COOHEMブランドの小物製品の企画・開発にも力を入れている。

keyword

山形から発信するものづくり

伝統工芸を生かした長く愛される普遍的なデザインに挑み、地域に根ざした産業から新しいブランドを展開するお二人に、山形をけん引する「ものづくり」についてお聞きました。

デザイン開発から2年の歳月をかけて完成したベレットストーブ「OU(オウ)」。間伐材などを粉碎して圧縮成型した木質ベレットを使用する環境にやさしいストーブ。製品左側の椅子は、同じく吉太さんがデザインを手掛けた「ファイチェア」。



「ニットツイード」と名付けられた独自の編地で作られるCOOHEM。雑貨は服に使えなかった編地を再利用し制作される。写真は、あゆみさん自身がお客様との会話のきっかけにしたいと、最初に発案した名刺入れと長財布。

ものづくりにかける思い

吉太さんは、高校で建築設計、大学で工芸、スウェーデンでは家具づくりを学びました。山形で起業した理由をこう話します。

「大学時代、工場を訪ねる機会が多く、優れた職人がいる山形で、腰を据えて一からものづくりに取り組みたいと思いました。これまで学んできたことを生かし、家具・プロダクト・店舗・住宅などジャンルを決めつけず、求められるものに幅広く応えていきたいと考えています」。

一方のあゆみさんは、専門学校で洋裁を専攻し、その中でも大好きだったニットに関わる仕事に就くことを希望していたそうです。

「見知らぬ山形の地でやっていくかという不安はありましたが、説明会で見た編地の技術力の高さが、入社を決め手となりました」。

新しい編地の開発から編み立て、縫製、出荷までを一貫して行える山辺町ならではのものづくりと、ブランドの魅力発信に取り組んでいます」。

伝統の技術と若いデザインを融合

あゆみさんが、COOHEMの雑貨づくりについて言葉を続けます。

「服を作った際の残りや傷物などの編地を再利用し、ブランドの魅力をより気軽に知ってもらえるようにと企画し、自ら型紙を起こして試作したのが始まりでした」。

現在は名刺入れ、財布、クッション、バッグなど、12アイテムまで広がりました。スリッパは、生産地として知られる河北町のメーカーとのコラボ製品だそうです。

吉太さんがこれに答えます。「多くの評価をいただいた『OU』も、山形でしか作れないものを世界へというコンセプトからスタートしました。ストープは、冬以外の季節も生活空間にありますから、使用しないときも愛でられるものとして、工芸品の美しさを取り入れたいと考えました」。

その結果、本体は山形铸件で铸造され、脚部分には山形県産杉材による成形合板を採用、繊細で上品な

たずまいが実現しました。

「COOHEMも、複数の異なる糸を編み立てる『交編』という独自に培ってきた技術と、若手の感性・デザインが融合して生まれました。

千年近い歴史を持つ铸件を取り入れた『OU』と共通するものがあります。」とあゆみさん。

山形のものづくりを世界に伝えたい

吉太さんは、COOHEMの商品を目の当たりにして、世界に通じる可能性を感じると話します。

「伝統は常に更新されてこそ、伝統であり続け、普遍性を持つことができます。また、多種の素材、技術など、山形のものづくり企業をつないでいくことで新しい可能性が見えてきます。その役割を少しでも担っていったらと思っています」。

あゆみさんも大きくうなずきます。「山形に来て一番驚いたのは、工場が多いこと。日常生活のほとんどのモノが山形で作られているとさえ感じます。この技術力と魅力をもっと県外、世界に発信していきます」。

